
よちよち赤ちゃん大冒険

両角忘夜

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

よちよち赤ちゃん大冒険

【Nコード】

N1671A

【作者名】

両角忘夜

【あらすじ】

あたし赤ちゃん。名前はチチカ。ある日突然いなくなったママを捜しに、変な奴らと旅に出たのです。

第一話 仲間たち

唇才バカという珍奇な怪獣が、先月から上野動物園の猿山を占拠し、悪さをしているらしい。

「あなた。そんな話すると、チチカちゃん信じちゃうでしょ」

「いいんだ、この子は。不思議系タレントか、アバンギャルドな小説家に育てるんだから」

「私は反対ですッ」

パパとママが争っている。あたしが産まれたときからずっと、喧嘩の繰り返しだった。夫婦ってヤだな。グレてやることに決めた。

はい、ここで自己紹介。あたしは赤ちゃん。名前はチチカ。趣味はまだない。

こんなふうには主人公が自己紹介する話はイケてない気がするが、話し手があたしだから大目に見てほしい。

さて、ある晴れた平日のことだった。あたしは、気持ちのいい午後のまどろみから目覚める。お父さんは会社へ、お母さんはどこかに出掛けたいらしい。どこかって……どこへ？ ママ、どこ行っちゃったのオ。

15年後にグレル計画で準備をしていたあたしよりも先に、ママが家出を決行したというのか。連日の夫婦喧嘩に疲れたのが原因か。心細いあたし。

このままママがいなくなったら、本当に変なタレントか小説家にされちゃう。そんなのヤダ。あたしはママを捜しに出る決心をした。しかし、あたしはまだ二足歩行もままならぬ、恥ずかしながらハイハイだ。ハイハイの行動範囲は限られている。

アーンアーン。あたしは大声で泣いた。いつも泣けばママが飛んできた。あたしの泣き声を聞いて、帰宅せよ、ママッ。

ところがやってきたのは、近所のサイケデリックな少年、ミチ太郎、6歳。

「よちよち。あんまり大声で泣いてると、誘拐犯がさらいに来ちゃいますよオ」。不吉なことを言う。

それからミチ太郎は、玄関に駐車してある乳母車にあたしを乗せ、外に連れ出した。母親捜しに協力してくれる気か。それとも、こいつが誘拐犯なのか。

家を出ると、世間には危険がいっぱいだ。片道三車線の国道、落ちたら助からない用水路、飛び込み自殺があつたという踏み切り、不良のたまり場であるゲームセンター等。そこに0歳のあたしと、6歳のミチ太郎が行く。

「おー、これこれ」。コンビ二の前で、太った三毛猫に呼び止められた。

「なんですか。あたしはチチカ、まだ赤ちゃん。ママを捜しに旅に出てるの」

「それは立派な心掛け。しかしおぬしら、何だか危なくて見ておれん。それで呼び止めた次第じゃが」

「子供だから、危ないに決まってるよオ」。脳の小さいミチ太郎が言い返す。

「よければ、拙者がお供つかまつるがどうじゃ。ただし条件がある」
「条件ってなんですか」

「母上が無事見つかったら、拙者をそなたの飼い猫にさせていただきます」

「いいですよ」

「有り難き幸せ。拙者これでも、猫ながら武士。鋭き爪で、チチカ殿の敵をばつさり斬り捨てるでござる」

こうして二人と一匹の、母捜しの旅が始まった。

一行は、買い物客で賑わう夕方の商店街に出た。

「チチカ殿の母上は、案外このような場所に、食料を買い求めに来ておるかもしれん」

「あ、あれ何だ」。ミチ太郎が声をあげた。

買い物客を掻き分けて、五人の荒くれ者たちが歩いてくる。その

後ろに一匹の熊。イタリアンマフィアのようなスーツでキメているが、今にもはち切れそうだ。

「あの熊が親分ってわけ？」

「……これはいくら猫目一刀流を極めた拙者でも、正攻法ではかなわん。とにかく、一時避難じゃ」

あたしたちは急いで、近くにあった喫茶店に避難した。アイスマルクを三人分オーダーする。ところが、続いて、熊と荒くれ者たちも入店した。異様な緊張感が漲る。

すぐ近くのテーブルを二つ占拠し、一人が大声で店長を呼ぶ。「とりあえず、何かツマミと、キンキンに冷えたビールを持ってこいッ。それから女も人数分用意しろや」

「あいにくではございますが、当店はキャバクラではございませんので」

「んだア。客にイチャモンつける気が、てめえエ」

「まあ、やめい」。手下の暴走を、熊親分が抑える。「悪かったのオ。日頃、取った取られたで体を張つとる奴らじゃけん。ついカタギの皆さんにも強がった口を利きよる」

「親分、すみませんでしたーッ」。チンピラが起立し、直角に頭を下げた。

「まあ、ええ。見苦しいから座れや。……オヤジさん、とりあえず何でもいいから、出来る料理を持ってきてくれ」

「は、はい」。店長は安堵した顔で引き下がった。しかしチンピラは納まらない。

「親分に恥かかせました。ここで指をつめるっす」

「やめいと言つとるじゃろうが！」

仲間も立ち上がり、男を座らせようとする。すごい迫力。ヤクザ映画さながらだ。

そのときだった。アイスマルクを飲み終えたミチ太郎が無邪気に言った。「すごいすごい。熊も喋るんだなア」

「んだ、コラ。もう一度言ってみろー！」。顔色を変えた男たちが

一斉に振り向き、あたしたちのテーブルを取り囲んだ。

「馬鹿ね、あんた。猫だつて喋るじゃない」

ところが肝心の三毛猫は、ゴロニヤンと鳴いて普通の猫のフリをしている。

「ごめんなさい。あたしはチチカ、まだ赤ちゃん。この子はミチ太郎、まだ6歳なの。はつきり言つて、あたしたちは未熟です」。そう言つて、あたしは必死で許しを求めた。

「ざけんな。謝つて済むんなら警察も念書もいらんわ」

「まてまて」。また熊親分が男たちを止めた。

「小僧、名をミチ太郎と言つたな」

「そうだよオ」

「今どき、実に勇氣ある子供とは思わんか。お前ら」

「はっ。しかし……」

「小僧、教えてやろう。普通そこらへんの大人はな、わしが恐くて、熊などと本当のことを言わんのじゃ。それに比べてお前は、肝が座つとる。あっぱれじゃ」

あたしは呆氣にとられて、ポカンとしていた。

「それにお前、そんなことを言つたのは、こいつが指をつめると言つたのを止めたかつたからだろう」

「だから違つよオ」。ミチ太郎は無邪気に否定したが。

「さすがじゃ。すべてを自分で背負う覺悟じゃな」

「お前……、俺を助けてくれたんかあ」

「だから違つつてばア」

「うつつ……」。チンピラが膝をつき号泣した。

「もうええ、もうええ」

そこにタイミングよく、テンコ盛りの料理が運ばれてきた。喫茶店なのに、刺身や焼鳥も並ぶ。

「まあ、盛大にやつてくれ。その猫くんも遠慮せず。さあさあ」

第二話 感動

妙な誤解のお陰で、あたしたちのご馳走にありつけた。

ところであたしは、ママのことを思い出していた。

「浮かぬ顔をしているが」。熊親分が訊ねる。

「実はあたし、お母さんを捜している途中なの。歳は25で、ぼっちゃり美人で、趣味は音楽鑑賞、少女時代はビジュアルバンドの追っ掛けもやってたらしい。けど、どこ行っちゃったのかわかんない。寂しいよお」

「うむ、それは大変。ノンキに宴会などしとる場合じゃないの。子分らにも手配させて捜させよう」

「ネエさん。何か失踪の手掛かりみたいなものはねえですか」

「そういえば数日前の夫婦喧嘩で、パパが、上野動物園に唇オバカって怪獣がいるとか、そんな話をしていたわ」

「するってえと、ネエさんのママさんは、上野に行った可能性が濃厚だと」

「うむ。動物園なら同じ動物同士、顔が利く強みがあるわい」。熊親分は胸を張った。

「しかし相手が、唇オバカという怪物となると手ごわいでっせ」

「馬鹿もん！ わしを誰じゃと思うとるんじゃ」。熊親分は牙を剥き、獠猛に吠えた。

「拙者も微力ながら力を貸すでござる」。三毛猫も今頃になって言う。

「よし決まった。野郎ども、すぐに武器をかき集める。上野動物園に向かう！」

そういうことで、あたしたちはヤバイ武器を満載したトラック二台に分乗し、上野動物園に向かった。

日が落ちて、動物園の門は閉まっていたが、トラックは正面から体当たりし、門をこじ開けてなだれ込んだ。

話をはしよる。結果的にそこには、唇オバカもママもいず、あたしたちは器物損壊と不法侵入、銃刀法違反の現行犯で逮捕された。主犯格であるあたしとミチ太郎は、未成年であることから厳重注意で済まされたが、熊親分とその子分、三毛猫侍はどうされるかわからない。

ママが泣きながら、「こんなことになったのは私が、チチカちゃんを置いてネットカフェに行ってたせいよ」と言い、パパも、「俺の方こそ、唇オバカなんて嘘ついたからこんなことになったんだ」と懺悔した。

でも安心して下さい。最後はハッピーエンドが待っていました。まずマスコミが今回の事件を、赤ちゃんを助けた動物たちという美談で取り上げた。すると、世界中で大反響となった。動物愛護や児童福祉の各団体が共同でキャンペーンを張り、減刑を求める署名活動も行われた。

あたしもミチ太郎も、連日ラジオやテレビに出演し、熊親分たちの無罪を訴えた。

さらに、あたしたちの活動を支援してくれる弁護士グループが動き、上野動物園と協議した結果、「今事件に関し、被害を訴えるつもりはない」との覚書をいただけた。

無罪放免となった熊親分たちと再会し、あたしは涙が出るほど嬉しかった。

「ありがとう」

「ありがとう」

わたしたちは例の喫茶店で、お互いの無事を祝った。そこであたしは感動のあまり、ハイハイから二足立ちになっていた。

「うむ。あっぱれじゃ」

そこにはもはや、人間の赤ちゃんだの、動物だの、荒くれだのといった境界はない。一つになれた瞬間があった。

三毛猫は約束通り飼い猫になった。毎日、カルカンをうまそうに食べている。

もうパパはあたしを、不思議系タレントやアバンギャルドな小説家にしたとは言わない。だってあたしは、度重なる報道番組の出演で有名になり、プロダクションからスカウトされ、新時代の赤ちゃんアイドルとしてデビューを果たしたのだから。

この喜びを全世界の子供たちと動物に伝えたい。

愛をこめて。

チチ力でした。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1671a/>

よちよち赤ちゃん大冒険

2008年11月7日07時04分発行